

言葉を創り出す国語学習の手引きの構想 —大村はま氏の学習の手引きを手がかりにして—

内田 由香利

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2021年10月25日受付、2021年11月25日受理)

要 旨

前稿では、大村はま氏の『旅の絵本』の実践を考察し、「手引き」の有効性について検証した。色々な視点で眺めることが出来る『旅の絵本』シリーズからは、多くの言葉が創り出されるであろうと想像し、本稿では、『旅の絵本Ⅲ』（イギリス編）を選択し考察を深めることにした。まず絵本の内容（子ども達を読み取ることが出来るであろう事柄）について整理した。そして、それを使用して、小学生高学年で「書く」授業を行う際の「手引き」について提案した。この「手引き」を活用した授業実践を通して検証を続けたい。

はじめに 一本研究の目的一

筆者は前稿¹⁾で、大村はまの「手引き」を活用した『旅の絵本』の実践について考察した。大村の「手引き」は、子ども達が想像豊かに思考を広げ深めながら、楽しく書く活動に取り組むことができるように工夫されていた。「手引き」により、絵本の挿絵を見る視点や作品の出来上がりのイメージが明確になり、子ども達は自由に書きたい内容を選択しながら想像豊かに書いていた。『旅の絵本』はシリーズ化され、教材としても価値が高いものである。そこで、『旅の絵本』の教材としての価値を示すとともに、子どもが多くの言葉を創り出し、書く活動に意欲的に取り組むための『旅の絵本Ⅲ』の活用方法について探ることを目的とする。

1 『旅の絵本』について

1-1 『旅の絵本』に込めた作者の思い

安野光雅の『旅の絵本』(1977)²⁾は、版を重ね息長く読み継がれている絵本であり、旅の舞台を変えてシリーズ化もされている。絵本であるにもかかわらず、保育園、幼稚園、小学校だけでなく中学校の図書室にまで置かれていることも多い。また、子どもと一緒に絵本を楽しむ親たちや、昔読んだ絵本の続編を大人になってから手に取る人たちなど、幅広い年齢層の人たちに愛読されている。筆者自身が、初めてこの本を手にとったのは、大学生の頃であった。卒業論文で読書指導の研究に取り組んでいたため、度々図書館や書店を訪れていた。その際目にして、絵の繊細さと物語性に魅せられた。旅人らしき男性を追ってページをめくるたびに発見があった。早速当時発行されていた3冊を購入し、もっと何か見つけられないかとわくわくしながら絵を隅々まで眺めたことを覚えている。基本的にどのシリーズも絵本の構成が共通している。絵本に文字（文章）はない。三角帽子を被った一人の旅人らしき男性が登場し、馬に乗って北欧であろう土地の村から町へ、町から村へと様々な土地を通過していくという設定である。そこには、豊かな自然とたくさんの人々の営みが描かれている。初版では、巻末に作者自身の解説等はなかったため、自由に思いを巡らしながら、海外の様子を想像し楽しんだ。

著書のあとがきには以下のような文章がある。

道はどこまでもつづいておりました。丘を越え、川を渡り、果てもない緑の牧草地に沿っておりました。いたるところに森や泉がありました。森には鹿が住み、流れにはマスが泳いでおりました。

街道を外れたところに、人家が固まり、集落ができておりました。このような市（まち）へ入るときは、きまって市の門をくぐるのです。そこには、いくつかの店が軒を並べ、必ず広場や教会があり、城があるか、もしなかったとしても、市全体が一つの城でした。だから、そこは、私にとって一つの国のように思えました。

そのような、市から市、国から国へ、迷いながら、はるばる旅をしました。あまり困ったときなどは、旅に出たことを後悔するほどでありました。しかし、人間は迷ったとき必ず何かを見つけることができるのです。私は、見聞をひろめるためだけではなく、迷うために旅に出たのでした。そして、私は、この絵本のような、一つの世界を見つけました。

これは、公害や、自然破壊など、誤った文明に侵されることなく、どこまでも緑のつづく、つつましくも美しい世界だったのです。(1977年1月20日) (下線は筆者)

このあとがきには、作者の思いが詰まっている。「道はどこまでも続く」「迷ったときに何かを見つける」「どこまでも緑の続く美しい世界がある」等は、現代の子ども達へ伝えたいメッセージのようでもある。子ども達は海外へも自由に行くことができる便利でグローバルな時代に生きている。しかし、様々な環境問題にも直面していこう。描かれている自然や生活の豊かさを感じ、様々なことを想像しながら考えることが出来るこの絵本は、子ども達から多くの言葉を引き出すことを可能にするのではないだろうか。

また、初版にはなく、途中の版から加わった作者自身の解説には、以下のような文章もある。

わたしがはじめてヨーロッパに行ったのは1953年のことでした。そのころは北極回りで行くので、目の下は流氷らしきものが見えるばかりでしたが、…<中略>

そのうち高度が下がったのでしょうか、白い道らしきものが見えてきました。川を渡っていますからきつと道があるにちがいない、と想像しました。そこを走る車は見えませんでした、道はそこに人間が暮らしている印です。あの道はどこへ行くのだろうと想像するだけで、胸がいっぱいになりました。

はじめて見おろす外国の町は、わたしにとって、すばらしい別世界でした。そこには見たこともない人たちが、それぞれ、いろんなことをして生きているのです。そうした千ほどの物語をつめこんだ「旅の絵本」を描きたいと思ったのは、飛行機が着陸する前の、期待に満ちた風景を見たからでした。(下線は筆者)

旅人の進む「道」が物語の中でどこまでも続いている理由、その道への作者の思いが読み取れる。そして、俯瞰的に見下ろす視点、そこに描かれた人々の暮らしは、この飛行機の着陸時の感動からきているであろうことも推測できる。ページをめくると時間が流れ、物語として成立しているのも納得できる。さらに、言葉や生活習慣の違いからの不安、コペンハーゲンからローマへの移動の際のエピソードについて言及した部分がある。

はじめは、何もかも違うと思っていた外国なのに、植物や動物は似たようなものだし、家の屋根は尖っているし、人間も皮膚の色が違うだけで、他に変わったところはありません。そのつもりで見ると違うものより、同じもののほうが多いのです。言葉は違っても、心の中は似ている、と思いました。(下線は筆者)

40年前から、グローバルな視点を持ち、人々の心のつながりを大切にする考えが表れている。ここにも、現代社会において大切にしたいことが書かれており、これは子ども達にも伝えたい思いである。

旅人は、その人々の暮らしとは全く別の世界から来て通り過ぎていくのです。何かしたいと思っても、旅人はあまり関わることもできないのですが、そこには、人の数だけ、物語があるはずです。私は、それを描きたいと思いました。「旅の絵本」はそうして生まれました。(下線は筆者)

大村の実践に、『旅の絵本』によって書く³⁾があるが、大村も、この絵本について「そこには、人間の生活があった。人々の会話が聞こえた。もう一枚、もう一枚とめくっていくにつれ、ますます、さまざまな人、庶民の生活が開けてくる。」(P.113)と述べている。子ども達が自由に想像する際に、人々の姿がある

ことで、自分の生活を重ね合わせたり、自分の経験と結び付けたりしながら豊かに想像することができるということだろう。また、その人々の会話さえも想像することで、より具体的にその生活を思い描くことができる。このように、自由に想像しながら言葉を創り出すことができる絵本は、子どもが意欲的に書くためにもふさわしい絵本であるといえる。

佐々木⁴⁾は、『旅の絵本』のユーモアについて論じている。『旅の絵本』には、取り上げた土地の名所や建築物、祭り、文学、人物、有名絵画などがさりげなく描かれていて、読者はそれを発見する楽しさを感じる。読者が感じるその楽しさや面白さをユーモアということが出来るが、『旅の絵本』の根底に流れるユーモアとは別のものとして考えるべきである」という。また、『旅の絵本』の評価として使われてきた、機知のある面白い作品というだけではなく、「なにより『旅の絵本』は、私たちがこの世界に生きているということの肯定を与えてくれ、安堵感に似たようなものを感じることができる」という。人々が生きて生活している姿を見て、読者は自分たちと重ね合わせたり、その思いを想像したりしながら、心が安らぐということだろうか。さらに、安野自身が「視点」にこだわっていることも指摘している。確かに「視点」を整理し、色々な視点からこの絵本を読むことで、子ども達の中にも想像豊かに物語が思い描かれ、それを言葉に表していくのではないかと考える。佐々木は、安野⁵⁾の示した「主観的視点」「客観的視点」「着陸寸前の視点」の3つの視点を以下のように述べている。「主観的視点とは、日々の営みの目であり、その土地に生きている人々の視点である」という。つまり、そこに描かれている人の立場になって考えるということだろう。「客観的視点とは、時間と空間を超えた視点の在り様だ」と述べる。「客観的であるがゆえの視点の自在さ、時間や空間に左右されない無限さは、神の視点とでもいうべき」だと続ける。そこに描かれている出来事を第三者的に眺め、自由に楽しむ、ということだろうか。絵本には、時代が混在していたり、構図的におかしかったりするものも含まれる。それらを受け入れながら楽しむという視点だろうか。では、「着陸寸前の視点」については、「主観的視点のように状況に巻き込まれてしまっているわけではないという点で客観性を持ち、完全に超越した神の視点ではないという点で主観性をもつ危うい視点である」と述べている。安野自身、それらの視点について以下のように述べている。

木は緑だし、野の花は一面に咲いている。よく見ると子どもは学校へ急ぐし、泥棒もいれば警官もいる。結婚式もあれば、そこで涙をふくおおかさんもいる。それを主観的な視点だとすると、空から見る場合は、いろんな立場から見る、客観的な視点から見ることになる。私は、着陸寸前の視点から世界を見たとき、そのような風景の中に、人間の歴史と自然と生活の共感を描きこんで絵本にしたいと思った。

彼が描きたかった世界を考えた時、日々の営み、そこで生活している人の視点（主観的視点）とそれを俯瞰的に見る視点（客観的視点）、そして時間経過とともに人間の歴史や自然、人生といった、しみじみとしたノスタルジックな気持ちなどを自由に感じる視点（着陸寸前の視点）を提示しながら、絵本に触れさせることが重要だと考える。

1-2 『旅の絵本Ⅲ』について

本稿で取り上げる『旅の絵本Ⅲ』⁶⁾は、イギリス編である。本稿で、シリーズの中からこの絵本を選択した理由は、子ども達になじみのある内容が多いと感じたからである。順序通りにいけば、『旅の絵本Ⅱ』（イタリア編）になるが、イタリア編には、全体を通して『新約聖書』の物語が描かれており、小学生にはやや難しいのではないかと考えた。また、イギリス編のあとがきには「村人たちは高い誇りを持っていた。村が市になることを「発展」とは思っていなかった。緑の国土をいとおしみ、精いっぱい村をきれいにして住んでいた。イギリスは世界で一番村の美しい国だと思った。」という文章があった。村人は便利になり生活の利便性が上がることを望んでいたわけではないのだろう。自分たちの郷土に対する誇りやいとおしみを子ども達にも感じ取らせたいと考えた。解説には安野自身の言葉が掲載されている。

この絵本には言葉がなく、はじめは何の説明も書いてありませんでした。わたしたちが外国の旅をし

でも、風景の中には何も説明はありません。でもレストランはどこか、ホテルはないか、と探せば、言葉は通じなくてもわかります。つまり、言葉の通じない自分をはじめに見知らぬ国に行って、いろんなものを、見たり聞いたりして、感じとっていくということは、その人の発見だと思います。発見をしたときは自分だけが見つけて知っているような、嬉しい気持ちになれるものです。

この本を描いた理由の一つとして、絵から色々なことを発見し感じ取ってほしい、同時に秘密を見つけた時のような嬉しい気持ちになってほしいという思いがあったことが伺える。続けてこう述べている。

大村はま先生という有名な国語の先生がありました。その先生がこの絵本を使って授業していると、「先生！ここに不思議の国のアリスがいるよ」と教えてくれた子がいたので、先生は知っていたけれど、おどろいて、「まあ、よく見つけたわね。わたしは何も知らなかった」と言ったのだそうです。その子は無口な子でしたが、なんだかとても嬉しそうで、それ以来、よく口をきいてくれるようになったということでした。

ここに描いてあるものが何なのか「言葉に置き換えて知る」ために、教えてもらうよりも、自分で見つけて、考えることが大切なのです。今はわからなくても、ある時ゴッホの絵らしいものを見て、「あ！ゴッホは『旅の絵本』を見ていたんだ」とふしぎがる日が来るかもしれないから、その時まで、秘密にしておいてもいい、とまあ、そのように考えて、説明はしていなかったのです。

大村の実践から、子ども自身の発見の喜びを大切にしてほしい、という思いが伝わってくる。そして、「言葉に置き換えて知る」ために、「自分で見つけて、考える」ことの重要性を記している。絵本の活用方法について示唆するものであろう。そして、作者自身も巻末に解説を書き加えた理由として以下のように記している。

ところが、だんだん時間がたって、わたし自身が何を描いたか忘れそうになりますし、たとえば「だれだれの生家」というようなことは、わからなくてもいいけど、私以外に知ることができないもの、ということもあるので、記録にとどめるという意味で、説明を書くことにしました。

しかし、全部ではなくて、説明してもいいようなものだけについて書きました。このほか、たくさん見つけてもらいたいものはあります。むかしアメリカ編を見た子どもから「みんながスーパーマンがいると言うのに見つかりません。教えてくださいませんか。どうか教えてください」という手紙がきました。「教えません。でも必ずいるのだから、探さない」と言って返事を書きました。その子が自分の目で見つけたときは、きっと嬉しかっただろうと思います。

作者がこのような思いで描いた『旅の絵本Ⅲ』であるが、表紙から道路の部分が国旗になったり、国旗が掲げられていたり、イギリス色が満載である。木組みの建物も雰囲気がある。扉を開くと、パレードの馬が描かれているが、後ろの扉を開くとチャールズ皇太子、ダイアナ妃の結婚式のパレードであることが分かる、という仕掛けもある。

絵本は、21の場面で構成されている。以下、各場面で描かれているものを整理する。

<場面1> 旅人が舟をこいでやってくる。ドーバー海峡の白い崖が描かれ、「ピーターラビット」を連想させる2羽のウサギが旅人を見つめている。イギリスを舞台にする雰囲気作りが早くも始まっている。空には数羽のカモメが飛んでいる。

<場面2> 雨が降っている。旅人が乗ってきたであろう船を引き上げる漁師達。大きな魚を運ぶ漁師。旅人は、木陰で雨宿りをしている。近くでは、「ピーターパンとティンカーベル」が旅人を見つめている。

<場面3> イギリスのケント地方の農家を描いている（作者の解説より）。旅人は、馬を手に入れたようだ。農夫と握手をしている。多くの人々がリンゴを収穫している。その木の下には、「ニュートン」が座り、リンゴが落ちるのを見ている。「ピーターパン」の小屋もある。「フック船長と海賊」が机を囲み、「ジャック」

- が豆の木に登っている。多くの羊が群れ、羊を肩に抱えた少年は「ペーターとハイジ」を連想させる。
- <場面4>旅人は馬に乗って小川の近くにきた。川辺には「不思議の国のアリス」、すぐ近くの木の上には「チェシャ猫」がいる。羊の毛を刈る人、糸をつむぐ人。川の中では子どもが魚を取っている。『マザーグース』の絵本に出てくるおばあさんや豚に乗った子ども。金の卵を産む鶏を抱え、巨人から逃げる「ジャック」。向こうには、「ストーンヘンジ」の遺跡がある。すぐそばには、そのミニチュアがあり、子どもが遊んでいる。
- <場面5>のどかな農村の風景。動物と人々がともに暮らしている。「ヘッジホッグ」と呼ばれるハリネズミ(作者の解説より)。ケルト十字の墓参りをする人。おじいさんを先頭とする牛の列に続こうとする旅人。「くまのプーさん」や時計を持った「不思議の国のアリスのうさぎ」もいる。
- <場面6>「グリニッジ天文台」とそこから延びる一本の線。経線0度の線らしい。「シェークスピア」の生家や恋人「アン・ハサウェー」の家もある。メイ・デー(5月祭)で行われるメイ・ポールの周りで踊る子ども達。日本と同じセッセッセで遊ぶ子ども達(作者の解説より)。幸福の王子の像には、色々な話を聞かせてくれる燕の姿が。何を話しているのだろうか。さらに、「くまのプーさんや仲間たち」の姿、木の中には「メリーポピンズ」の影も見える。キツネとアヒルが話している様子からは、「ピーターラビット」の話の連想させる。また、このページから一部の木がピンク色に色づき、花を咲かせているようだ。桜の花を連想させる。以後8場面まで描かれており、日本的なテイストを取り入れているように感じる。
- <場面7>馬車や樽を作っている人、キャベツ畑、「ピーターラビット」の生みの親である「ピートルクス・ポター」の住んだ家、「ジュディ・テイラー」の家、そこで飼われていた黒い牧羊犬(作者の解説より)。小学校で遊んでいる子ども達の姿は日本とあまり相違ないが、イギリスの伝統的スポーツであるクリケットをしている子どももいる。森の中には、リスやフクロウの姿も見える。かぼちゃの家もある。木の上は、「ピーターパン」の家だろうか。
- <場面8>「ウィリアム・モリス」、「アーサー・ラッカム」、「ケイト・グリナウエイ」の家。門の前には、グリナウエイ本人と花束を渡そうとする子ども達。HOKEY POKEYのアイスクリーム屋さん。田舎を回る何でも屋さん(作者の解説より)。森の中で遊ぶ少女たちは、「グリナウエイ」の絵本の中に出てくる子ども達。真ん中のグリーンのドアの家には、ANNO1981の文字が見える。旅人の姿のすぐ後ろには、旅人の似顔絵が掲げられている。以後のページでは、イギリス産の様々な犬種の犬が見られる。
- <場面9>家畜の品評会。『ABCの絵本』を見ている子ども達(作者の解説より)。「フック船長」も登場させている。
- <場面10>カンタベリー大聖堂。『カンタベリー物語』に出てくる巡礼団(作者の解説より)。二階建ての乗り合い馬車はハイデッカーを連想させる。
- <場面11>「マザーグース」の中に出てくるロンドン橋が落ちたところ。「ハンプティ・ダンプティ」のタマゴ、たらいの船など。ロンドン塔には首切り役人の姿も。川の上を船で連れていかれる「トーマス・モア卿」。塔から登って渡ることもできるタワーブリッジ。足元の深い溝に落ちているサングラスを見つけたら、それは安野のものらしい(作者の解説より)。「グリナウエイ」の絵本で有名な少女の列の様子も見える。
- <場面12>英国国会議事堂のシンボルの時計塔。スコットランドバグパイブ楽団のパレード。木骨模様のロンドンのデパート。「ピーターパン」の姿(作者の解説より)。有名なビッグベンの前を通り過ぎるパレードは、巻末に出てくる「チャールズ皇太子夫妻」の結婚式の様子だろう。多くの人が見守っている。脚立に乗っている人もいるが、構図が奇妙である。旅人も珍しく馬を降り、人々の列の後ろでたたずんでいる。
- <場面13>セント・ポール寺院。ピカデリー・サーカス近くの噴水。子どもの人形を置いて、バケツにお金を入れてもらおうとしている子ども。後ろ手に立つ警官。二階建ての観光馬車(作者の解説より)。屋台の傘はイギリスの国旗になっている。
- <場面14>ロンドンのトラファルガー広場。高い塔の上には「ネルソン提督」の像。塔の下には、刑事コロンボとシャーロック・ホームズの姿。ダイアナ妃・チャールズ皇太子の有名な写真の構図通りの姿。似

顔絵は、ビクトリア女王、ヘンリー八世、アン女王、シェークスピア、バートランド・ラッセル、ニュートン、チャーチルのもの（作者の解説より）。ビートルズの姿。犬の散歩の様子では、胴が長すぎる犬もいる。前のページと比較しながら見ると、ハトに餌をあげる少女や風船を持つ人、ベビーカーを押す二人の子ども達の様子が、同じ場所で見られる。旅人と同じ風貌の人が旅人を眺めている。

<場面15>ウィンザー城。リア王、ハムレット、ベニスの商人、マクベス「森が動く」の場面（作者の解説より）。狩りに向かう紳士や騎士の戦いの様子。

<場面16>コンスタブルの風景画。『たのしい川べ』のカワウソとヒキガエル（作者の解説より）。ゲインズボローの風景画。

<場面17>水門の水位を調節して進むナロウボート。ロミオとジュリエット（作者の解説より）。クリケットをして遊ぶ人や、スコッチウイスキーのシンボルマークである「ジョニーウォーカー」の姿も描かれている。ヨットのマストには、この絵本の発行年である1981の数字が見える。

<場面18>ネス湖にネッシーの影がある。木陰に貴族の馬車をねらう追はぎがいる。森の中には、『真夏の世の夢』に出てくるロバになった人が寝ている（作者の解説より）。煙突掃除の構図が奇妙である。鶏をくわえて逃げるキツネやヘッジホッグも見える。樽を載せた馬車の前にジョニーウォーカーが再度登場し、今度は道路を歩いている。旅の舞台が確実に北へ移っている様子が見て取れる。

<場面19>「ロビンフッド」が弓矢を射ている。スコットランドの有名な力比べの様子。ゲインズボローの風景画（作者の解説より）。

<場面20>スコットランドの北、岩ばかりの海岸。『ドリトル先生アフリカへ行く』の場面がある。（作者の解説より）くまのプーさんがハチを逃がし子ども達が逃げている。

<場面21>旅人がボートでイギリスから離れている。海岸には、昔の城か教会の跡がある。（作者の解説より）少年が馬を引き、手を振って見送っている。

各場面を見てきたが、やはりそこには多くの物語が盛りだくさんに描かえている。有名な出来事や歴史的出来事からだけでなく、そこに描かれている人々の姿やその生活から、どんなことを考えているのだろうと、その人物の気持ちになって自然と考えてもいる。子ども達がこの絵本を見ながら、どのような言葉を創り出すのか、とても楽しみである。

2 『旅の絵本Ⅲ』を活用した実践

2-1 大村氏「手引き」の効用

大村氏は、国語教室の軸として様々な授業で「手引き」を作成した。「旅の絵本」の実践においても、色々な子どもが発想豊かに書くことに没頭する姿を想像しながら、「その都度その時の為だけに」「子どもの実態に合わせ、どの程度の子どものこともイメージしながら」作ったであろうことは、前稿で述べたとおりである。そこで、ここでは、「実際に『旅の絵本Ⅲ』を活用した書く授業において、小学生向けの手引きを作成するとしたらどのような内容であればよいか」について考えていく。

大村の手引きは以下のような内容であり、そこには様々な教師の意図があった。

①まず「手引き」の最初で、文章の形式（日記、記録、手紙等）を書いてみたいことと照らし合わせながら選択できるようにしていた。文章の形式を決めることで、相手や目的も明確になり、子どもは自分がこれから書く文章のイメージをもつことが出来ていた。

②文章にして伝える相手に「絵を見せながら伝える」ことを意識させていた。「絵を見せながら伝えている自分の姿」と「自分の前にいる伝える相手」を具体的にイメージさせることで、使う言葉の意識化が図られていたであろう。

③「人生断片 ここにある人生」と記されてあった。これを読んだとき、子どもは「どんな人生が描かれているのだろう」という視点でこの絵本を眺めるだろう。また、「訪問」「労働」「誕生」と具体的な場面を示すことで、子どもはその視点をもってページをめくるだろう。中学生にとっての視点としては有効だっただろうと推測できるが、その視点は子どもの発達段階に合わせて変える必要がある。また、絵本に描かれている内容によっても変更する必要がある。

- ④「働く 笑う 走る うたう 逃げる」という動詞を挙げ、「ここにも人の生活が」と記されていた。そのような動作をしている人を探す視点となり、どのような人物に注目したらよいか迷っている子どもにとっては有効な項目であると考えられる。
- ⑤「心から心へ ひびきあうことば」として「吹き出しをつける」とあった。吹き出しをつけることは、人々の中に会話が生まれるということである。想像することで会話はさらに広がるだろう。特に、小学生の子どもにとって、吹き出しは身近であり、その人物の気持ちを想像する手だてとして有効であろう。
- ⑥「ここに人間がいる」「ここに人間が生きている」という言葉が添えられ、それで始まる詩を作ることも示唆されていた。とりあえず書くページを決め、「ここに人間がいる」と始め、その後どんな人間がいるのか、何をしているのかについて、子ども達がじっくりと絵を眺め、そこから想像を膨らませ、人々の様子に着目して書くために有効な項目だろう。
- ⑦「ぼくは馬に乗って、人生をさがしに行った。(出た)」と創作してみるのはいかがでしょうか？と、提案している。どのような出来事や人物に出会ったか、何を見たのか、何を考えたのか、旅人になって絵の中に入り込んだつもりで、場面を追って考えていくことで、独自の物語が創作できるだろう。
- ⑧「絵のなかのどの人かになって書く。」と記されていた。このシリーズの絵本には、同一人物が複数のページに出てくることがある。つまり、ページをめくるごとに動きがあり、していることが変化している。それをたどることで、その人物についてのストーリーができる場合もある。そのような視点で書くこともできるだろう。
- ⑨「もし加えるなら 私はこの一ページを 私の加えたい一ページ」と示し、新たなページを加えてもよいことを提示していた。最後のページの後に続きの物語を想像する場合もあるだろうし、途中で挿入する場合もあるかもしれない。自由に旅人や出てきた人物を選択し、その視点で物語を書き進めることも可能にする項目である。

以上のように、子ども達が迷わずに書き進めることが出来るよう作成した大村の「手引き」を参考に、『旅の絵本Ⅲ』の内容に合った「手引き」を作成してみたい。

2-2 『旅の絵本Ⅲ』を活用した授業

まず、この絵本を活用した授業（小学校高学年を想定）でどのような学習活動を設定したらよいかについて考える。小学生ならば、おおよそ以下の学習活動になるだろう。

- (1) 教師が『旅の絵本』について紹介する。(文字はないが、そこに色々な人、物語が描かれていることを具体的に示しながら)
- (2) 各自で『旅の絵本Ⅲ』を読む(じっくり絵を見る)。
- (3) 学級全体で簡単な感想を伝え合う。
- (4) 作品作りへの見通し(どのようなものを書いていくのか)をもたせる。
- (5) 各自が詳しく書きたい内容を選択する。
- (6) 各自で書き進める。(交流の時間を入れてもよい)
- (7) 書いた作品を共有する。

さらに、(4)～(5)を指導する際には、以下の読み方を提示する必要があるだろう。①本全体の進み方を見る(時間の流れの中で)②ページを決めて見る(1.全体を眺める 2.部分で見る 3.前後で見る)

以上の学習活動を整理すると、(1)～(3)までが、学級全体での「話し合う」活動、(4)～(6)が個人の「書く」活動、そして最後に(7)で共有する活動だといえる。そこで、「話し合う」活動に向けての絵本の読み方について示した手引きと、個人の「書く」活動に向けた手引きの二種類を作成し活用したらどうだろうか。

子ども達が『旅の絵本Ⅲ』から「言葉を創り出す」過程は、以下の通りである。まず(1)教師から絵本を紹介される。その紹介の仕方によって、興味・関心の高まり方も変わってくるため、最初の提示の仕方は大変重要である。教師自身が絵本の内容を伝えることを楽しみ、子どもの実態に合わせて伝え方を工夫しながら、自分自身の発見や感動を伝えることが重要であろう。挿絵を拡大して提示する、タブレットを活用し

個々の児童に見せる等の工夫ができる。そして、紹介された絵本を見ながら、自分の中で自分自身と対話する。「(2) 各自で『旅の絵本Ⅲ』読む(じっくり絵を見る)」活動である。想像力を働かせ、自分なりに絵を読むことになるだろう。その際、(3)の活動を設定し感想を話し合うことで、各自の考えはさらに広がり深まるであろう。そこで、以下のような「手引き1」を提示する。「感じたことや考えたことを自由に紹介し合いましょう」と呼びかけ調で、自由で楽しい活動をイメージさせる。そして、問いかけ調でそれに答えながら考えるようにする。ただページをめくって「見る」だけではなく、その内容を読み取ることが出来るようにするといった、字のない『旅の絵本』の読み方を教えるものにした。 (3)の学級全体で話し合う

〈『旅の絵本』学習の手引き1〉

※『旅の絵本Ⅲ』を読んで、感じたことや考えたことを自由に紹介し合いましょう。

そのために…

1. まず、全体を読んでみましょう。どのようなお話が思い浮かびますか？
前後で、ページをめくってみましょう。時間が流れていますか？
2. どの場面が一番気になりますか？
(どの場面について詳しく書いてみたいですか？)
3. 物語などに出てくる誰か知っている人(動物)を見つけましたか？
その人(動物)は、そこで何をしているのでしょうか？
どんなことを考えているのでしょうか？

活動に向け、絵を見ながら自由に見つけたり想像したりする時間を大切にする。知っている物語の登場人物を見つけた時には、グループ活動もはさみながら、考えを出し合い、その人物が何をしているのかについて想像が広がるようにする。

そして、(4)で具体的な書き物を決め、更に(5)で読み深めることになる。(6)の活動で書く意欲が持続し、さらに高まるためには、やはり書きたい内容が具体的であることが必要である。そこで、個人の書く作業に向けて、以下のような「手引き2」を提示するのはどうだろうか。

〈『旅の絵本』学習の手引き2〉

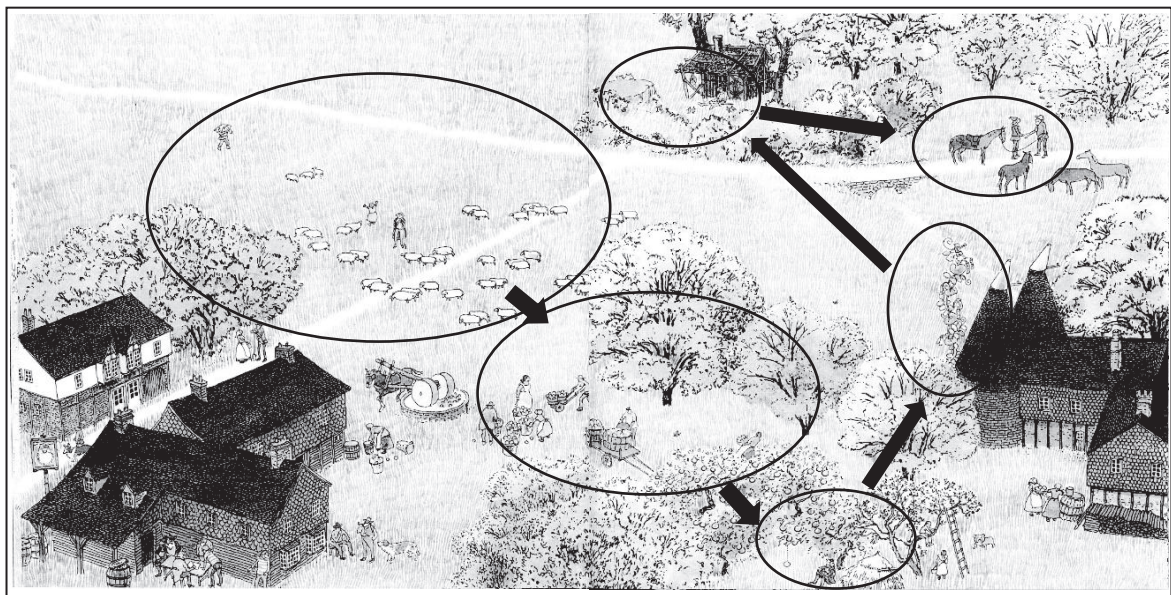
※出来上がりの作品を想像してみましょう。

4. どんな形式で書きますか？
<ヒント>
①旅日記(旅人になったつもりで)
②旅先からの手紙(誰かに旅の様子を知らせるつもりで)
③創作物語(絵を見ながら、お話を作りましょう。続き話でもいいですよ。)
④人々の生活の様子を知らせる文
・働く 遊ぶ 集う 笑う そのような様子の人がありますか？
・吹き出しをつけて、何を言っているのか、考えてみましょう。
⑤詩「ここに人間がいる」「ここに人間が生きている」と始めてみましょう。
・どんな生活が見えますか？
・人は生きて、何をしていますか？
何を考えていますか？
これからどうしようと思っているのでしょうか？
⑥絵の中のどの人かになって、思いや考え、言いたいことなどを書く。
※五感を働かせてみましょう！何が見えますか？どんな音が聞こえますか？
どんなにおいがしますか？味や手触りも感じたら書き加えてみましょう。
5. 誰に読んであげますか？
自分が選んだ絵本の場面を見せながら、書いた作品を伝える場面を想像しましょう。

文章の形式を決定し、様々な書く視点を与えながら、自由に楽しみながら書くことができるようにする。自由性があることで、書くことに苦手意識をもっている子どももある程度は書き進めることができるのではないかと考える。日記や手紙、創作物語、詩等、仕上がりの作品のイメージを明確にもたせる。そして、伝える相手を具体的に想像させることで、書く文章の内容や書き方も具体的になるのではないだろうか。先に述べた、主観的視点、客観的視点で色々な立場に自分の身を置いて、考えることができるようにさせたい。

そこで、この「手引き2」を見ながら子どもが書くであろう文章の具体について、実際に挿絵を示しながら考えてみることにする。

学習活動(3)の学級全体での交流により、自分の書きたい内容が見つかってきたとする。その後、例えば、図1の場面3を選択した子どもはどのような文章を書くだろうか。



【図1 『旅の絵本Ⅲ』場面3の絵】

「ペーター、こっちよー。」ハイジが両手を上げて、呼んでいる。ここはイギリスだが、なぜか「アルプスの少女ハイジ」が住んでいるのだ。羊を肩に担いだペーターはこちらへゆっくりと向かってくる。「疲れたよ。でも迷子にならなくてよかった。ほら、仲間の方へ行きな。」そう言って、羊を下した。確かアルプスの少女にはヤギのユキちゃんが出てきたが、ここでは、羊の世話をしているようだ。

リンゴの木には実がたわわになっており、リンゴ狩りの真っ最中である。おじいさん、おばあさん、家族全員で真っ赤に熟れたおいしそうにリンゴを集めている。あちこちでリンゴを運ぶ人たち。このリンゴはどこに運ばれていくのだろう。馬は、リンゴをつぶしているのか。ジュースでも作るのか。辺りにはリンゴのおいそうな香りが漂っている。そのような中、のんびり木の下に座ってリンゴを眺めているのは、ニュートンのようだ。引力の法則はどの瞬間に思いつくのか。

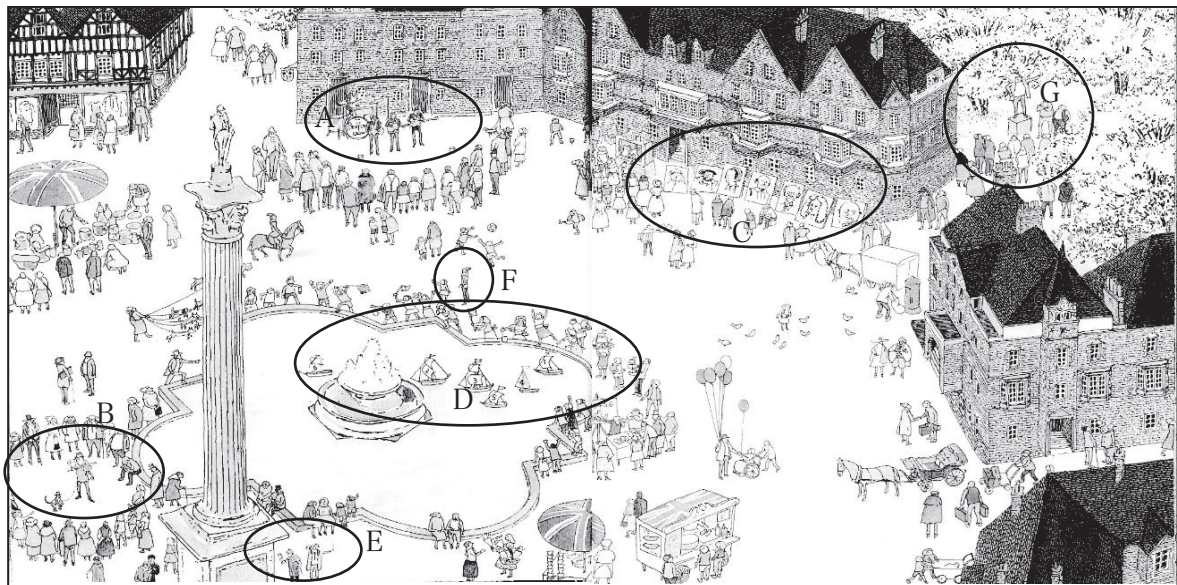
ジャックが豆の木に登って行っている。まだまだ天まで届きそうにはないけど、早く空まで伸びて巨人のところから金の卵を産む鶏を持ってきたらいいのに。

よく見ると、ペーターパンもいる。小屋の前で疲れた様子で座っている。近くには小人たちが話しかけている。「ねえ、ネバーランドに行きましょう。」と誘っているのか。切り株のところから、遠慮がちに動物が眺めている。いつまでも子どものままでいられる国、ネバーランド。楽しいかな。でも、早く大人になりたい気もする。

旅人は、おじいさんと握手をしている。どうやら一頭の馬を手に入れたようだ。これから始まるこの国の旅がどうなるのか、とても楽しみだ。

上記は、「④人々の生活の様子を知らせる文」として、絵の中のいろいろな部分を矢印のように視点を動かしながら書いた文章である。本当はどうなのか定かではないことも、このような文章では楽しく書き進めることができる。さらに、「吹き出しをつけましょう」とう「手引き」のことばを読むと会話が生まれる。さらにじっくり場面の様子を想像していくと、多くの言葉が溢れてくる。子どもならば、もっと豊かに想像するだろう。

次に、図2「場面14」の広場での様子を②旅日記として書き留めるつもりで書いてみる。



【図2 『旅の絵本Ⅲ』場面14の絵】

9月25日（火）

今日は、ロンドンのトラファルガー広場に来た。とても良い天気で、色々なところに人が集まっている。あちこちから、楽しそうな歌声が聞こえる。ギターやドラムの音色が響いている。ビートルズが何か演奏しているようだ (A)。とても楽しそうににぎわっていて、一緒に歌っている人々の声も聞こえる。バイオリンの音色も聞こえてきた (B)。向こうには、シェークスピアやニュートンなど似顔絵が飾られている (C)。有名になったら、僕の似顔絵も飾ってくれないだろうか。広場中央の噴水のところでは、ヨットレースがあっあって、子ども達が必死に応援している (D)。噂によると、シャーロックホームズやコロンボ刑事も来ていたらしい (E)。何か事件でもあったのだろうか。ちょっと気になるが、とにかくこの広場にいる人達は、ここに住んでいることを楽しんでいるようだ。私は、この国を訪れた旅人であるが、馬を降りて多くの人と触れ合えば、すぐに多くの友達ができるに違いない。実際、自分を見つめている人の視線を感じたが (F)、先を急いでいたのでそのまま通り過ぎてしまった。向こうに森が見えてきた。何やら演説するような声も聞こえる。(G) この町の中を通り過ぎると、またのどかな自然と人々のゆったりとした姿を見ることが出来るかもしれない。楽しみである。

実際に文章を書いてみると、「手引き」により、思考が広がるのが実感できる。書く内容に詰まった時に「手引き」を読むことで、新たな視点が加わり、また想像が膨らむ。

子どもの思考に添い、自然に目標に到達できるような、素朴な手作り感のある「手引き」。それがあれば安心して学習に取り組むことができる信頼できる「手引き」。本稿では、『旅の絵本Ⅲ』を活用する際に有効な「手引き」について考えてみた。その有効性については、実践において検証する必要があるだろう。本実践は、

授業協力を得て本年度中に公立小学校にて実践する予定である。実践後さらに検証を深めたい。

<引用文献>

- 1) 内田由香利「書く意欲を高める「手引き」の必要性と活用-大村はま氏の『旅の絵本』の実践を基に-」『九州女子大学紀要 第57巻2号』(2021)
- 2) 安野光雅『旅の絵本』(1977初版、2021第69刷) 福音館書店
- 3) 大村はま『大村はま国語教室 6』(1991) 筑摩書房 p.113
- 4) 佐々木美砂「安野光雅『旅の絵本』を読むということ-絵本というメディアにおける生の感情としてのユーモア-」『京都大学学術情報誌』(2012)
- 5) 安野光雅『空想書房』(1991) 平凡社 p.70
- 6) 安野光雅『旅の絵本Ⅲ』(1981初版、2021第34刷) 福音館書店

Concept of a guide for learning a national language that creates words ~Using Hama Omura's learnig guide as a clue~

Yukari UCHIDA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In the previous paper, I considered the practice of Omura's "Travel Picture Book" and examined the effectiveness of "Tebiki". Imagine that many words will be created from the "Travel Picture Book" series, which can be viewed from various perspectives, and in this article, I chose "Travel Picture Book Ⅲ" (UK edition) to deepen my consideration. First, I organized the contents of the picture book (things that children could read). Then, using it, I proposed "Tebiki" when conducting "writing" classes in the upper grades of elementary school. I would like to continue the verification through the lesson practice utilizing this "Tebiki".

Keywords : "Travel Picture Book Ⅲ" (UK edition) , "Tebiki"